大戦中船橋市にて

川奈部　眞佐雄　（宮　本・81歳）

日本歴史や世界歴史を学んで知る通り、戦争により強い者が弱い者を征服して領土を取ったり、自分の意向を相手に押し付けたりする事は、普通当然のようになって居りました。勝てば官軍、負ければ賊軍と言われて来た訳です。

昭和の太平洋戦争も貧乏国日本が外へ向って発展したり、又、生存上必要な物資を輸入しようとしても妨害されて、其の為先行色々な心配が起きた為に之を打ち破る可く戦争を始めた点も有り、全部が悪いと言う事も言い切れない訳です。

戦争の始めは勝つと思って居りましたが、段々に相手国の物量と新兵器に押されて、各地で敗退の止むなきに至りました。私は薬剤師だった関係で、医師、歯科医師等と組合わせて、数人で一組の救護班を地区別に編成して、毎日訓練やら実地に活動したりして居りました。始めは船橋市内だけでしたが、昭和二十年三月以降は、毎日東京都方面に出張応援に行きました。

三月十日の東京大空襲の時は東京の本所、深川方面が一夜で焼野原となり、拾萬人近くの人が死亡し、負傷者がぞろぞろ歩いて江戸川を渡り、千葉県へ入って参り、船橋にも大ぜい入って来て、公共施設、旅館等を開放して収容し、やけどや傷の手当をしました。殊にやけどが多く、重症の人は段々に亡くなって行き、悲惨な状態が続きました。薬も充分になかった為、やけどが化膿して家の中は一種異様な臭気に包まれました。

船橋市には日本建鉄等の軍需工場も有りましたが、大きな空襲は市街地区になかった為、戦中戦後の物資不足の時期には大変助かりました。

生活物資はみんな配給制度で自由に買えませんので、私共も一度葬式を行った時は、農家の知人に頼んでさつま芋を分けて貰い、集まった人達に一切れ宛、召し上がって頂きました。現在から考えると想像も出来ない事ばかりでした。

只今、世界の各地で民族と民族との争い、国と国との戦争をしている所が有りますが、其の地区の住民は毎日命を失い、あちらこちらへ移動して悲惨な状態が報じられて居ります。日本は至極平和そのもので、経済的にも恵まれ、今改めて平和の尊い事をつくづく感じます。

日本は今後共此の平和を続け、国内は勿論ですが外国とも、友好関係を続けて行くように切に祈っております。